

# 映画『主戦場』上映会 ゲストトーク

要旨

渡辺美奈さん

アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」(wam)館長

○本部：2019年11月30日 ○関西：2019年10月26日

※ゲストトークは、映画上映後、参加者から集めた質問用紙に答える形で進めました。  
誌上では、本部と関西2カ所での内容をまとめて加筆・修正しています。

## 回映画について

アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」(以下、wam)は、館内で騒いだり、展示品等を壊したりしない限り、誰でも見学ができるオープンな場所です。監督のミキ・デザキさんもwamに何度か来て資料を見て勉強していましたし、私も彼の質問に答えたりしていました。1年くらい経った頃に、彼の研究の一環として2時間くらいのインタビューを受けました。劇場公開は難しいのとは思っていましたが、蓋を開けてみるとメディアでも話題になり、今まで日本軍性奴隷制に関心がなかった層にも届いて良かったと思えます。wamにも、『主戦場』を見た」と来館してくれる人が4月以降、増えていきました。

『主戦場』は、日本軍性奴隷制をめぐって、いま何が論争になっているかを伝える映画で、その意味では成功していると思います。自分が出ているのでコメントがかえって難しいのですが、個人的には、「慰安婦」問題は「日韓問題」ではなく、

日本の側、とりわけ過去の歴史に向き合えない人たちの問題であることが伝わったのが良かったと思っています。

一方で、最後の場面で韓国の金学順さんが名乗り出たときの歴史的な映像が出てきますが、その後、日本軍の性奴隷にされたアジア太平洋各地の女性たちが名乗り出たことは映画からは見えてきません。サバイバーの女性たちに焦点をあてたドキュメンタリー映画も数多く制作されていますが、多様な女性たちの証言や被害実態に触れることができる場として、wamが機能できてよかったです。

また、日本で展開された運動の文脈で言えば、大きな役割を果たした在日韓国・朝鮮人の女性がこの映画には一人も出てきません。運動を正確に伝えるのは困難とはいえ、韓国、日本、そしてアジア系米国人が運動のアクターとして印象付けられてしまっている気がします。実際は、フィリピンや台湾、中国、そして欧米諸国の女性たちも尽力し、武力紛争下の性暴力という普遍的な女性の人権問題として

取り組まれて来ました。映画が焦点を当てている時期は、2000年代後半以降であることも指摘しておきます。

## 回質疑応答

問 韓国国内では「慰安婦」問題はいつ頃に認知されたのですか？

答 なぜ1990年代になってから広く知られるようになったのかについては、歴史的な背景を考えると必要があると思います。

日本の敗戦によってアジア太平洋戦争が終わった時、日本軍の「慰安婦」にされた女性たちの多くは戦地に置き去りにされました。とりわけ朝鮮や台湾などから連行された女性たちは、言葉もわからず土地勘もなく、故郷に帰るのは極めて困難だったと思います。運よく帰国できた女性も、自分が日本兵の性の相手をさせられていた事実を誰に語る事ができたでしょうか。親はすでに亡くなっていたかもしれないし、たとえ生きていたとしても、娘に起こったできごとを受けとめてくれると期待できたでしょうか。結婚したい人が現れた時はど

うするでしょうか。さらに、戦後の混乱があり朝鮮戦争も勃発しました。被害をひた隠しながら、生き延びるために懸命だったと想像するのは難しくありません。

当然ながら、日本兵は「慰安婦」の存在を知っていました。wamではいま、旧日本軍が慰安所を設置した地域を示す「日本軍慰安所マップ」の改訂作業を行っています。その作業の一環として、元兵士たちの回想録を山ほど読んでいます。兵士たちは、慰安所の場所、値段、女性が朝鮮人なのか現地の人なのかといったことを自分の回想録にちゃんと書き留めています。戦争体験の一面面としてあつげらかんと書いていて、悪びれる様子さえありません。

日本や韓国の社会もまた、「慰安婦」が存在していたことは知っていました。1970年代、日本の男性たちが韓国に性を買に行きくようになりました。朴正熙政権下での外貨獲得目的とした「キーセン観光」に対して韓国教会会女性連合会や梨花女子大学の学生たちが、「日本男性が韓国女性を性の奴

隷にしている」と批判し、空港でデモをして闘いました。日本の女性たちも呼応して羽田空港でデモしましたが、当時の女性運動の雑誌、『アジアと女性解放』には、戦争中は鉄砲で、今は札束で女性たちを凌辱していると、「慰安婦」とのつながりを指摘しています。

1970年代から80年代にかけて、日本では千田夏光の『従軍慰安婦』が出版され、日本人で「慰安婦」にされた城田すず子さん（仮名）は、「慰安婦」として受けた被害を自伝に著してテレビにも出していました。でも、その時は「かわいそうな戦争の被害者」という域を出なかつたのだと思います。沖縄の渡嘉敷島に連行されて「慰安婦」にされた裴奉奇さんのルポや映画が発表されたのも1980年代で、作家の川田文子さんの『赤瓦の家』は1987年が初版です。

一方、韓国では大きな地殻変動が起き始めていたと思います。民主化闘争のなかで、1986年に韓国の富川警察署内で女性が警察に拷問される事件が起こりましたが、その被害者である権仁淑さんは、

泣き寝入りせず、大変な勇気で警察による性暴力を告発しました。その国家権力による性犯罪事件の被害者を、韓国の女性運動が支えたのでした。元TBS記者の山口敬之さんから性暴力を受けた伊藤

詩織さんの事件を考えると、日本よりも三十年先を進んでいます。性暴力の被害者を支える土壌が、民主化運動を通じて韓国の女性たちの中に育まれていた、そのことは、金学順さんの名乗り出と無

～ 映画『主戦場』～

2018年/米国/122分/配給=東風)  
監督・脚本・撮影・編集・ナレーション=ミキ・デザキ

ミキ・デザキ氏は1983年生まれの日系アメリカ人2世であり、1歳から17歳までフロリダ州で暮らした。「フロリダ州は人種差別の多いところ」で、自身も「子供のころから激しいアジア人差別にさらされてきた」とインタビューで答えている。2003年に交換留学生として広島大学で学ぶために初来日したことが、日本文化や自身のルーツに関心を持つきっかけとなった。再来日した2007年からの5年間は山梨県や沖縄県の学校で英語補助教員として働く傍ら、「日本にも人種差別はある」との考えから、ユーチューバーとして沖縄の米軍基地問題や部落差別をテーマに数多くの作品を製作した。2015年に上智大学大学院に進学し、この映画の素材となる動画を撮り始めた。

映画は「慰安婦は20万人いたのか」、「強制連行はあったのか」、「性奴隷とは」、「歴史教育」といったテーマを提示しており、それぞれ対立する主張を交互に紹介している。多くの米国人と同じく、「20万人の女性たちが強制的に性奴隷にさせられていた」と理解していたデザキ氏にとって、「なぜ日韓で論争になっているのか」、「なぜ歴史修正主義者たちがこれほどまでに歴史の考えを変えようとしているのか」という疑問を解いていく過程こそが、この映画のストーリーとなっている。

2019年6月に一部の出演者が上映中止と損害賠償を求めて東京地裁に提訴するなど、映画の枠を超えた「論争」となっている。

関係ではないと思います。後の韓国挺身隊問題対策協議会の初代共同代表となる尹貞玉さんの地道な調査、その結果のハンギョレ新聞への連載、そして盧泰愚大統領の訪日の際の声明発表など、1980年代後半の様々な前史があると思いますが、性暴力を受けた女性を支える運動が育っていない場所では、日本軍の「慰安婦」にされた女性たちの名乗り出が難しいことは、他国の状況からも言えると思います。

もう一点、金学順さんの名乗り出には大きな特徴があります。それは、名乗り出て被害を語っただけでなく、日本政府の責任を追及したことです。実は、裴奉奇さんだけでなく、タイに残留していた盧寿福さんなど、日本軍の「慰安婦」にされた朝鮮の女性の証言は、1980年代からメディアに登場していました。2014年に戦後の読売新聞の「慰安婦」記事の全調査を実施した時に気がついたのは、日本のメディアでは「名乗り出」よりも、日本政府の責任を問う「提訴」の方がずっと大きなニュ

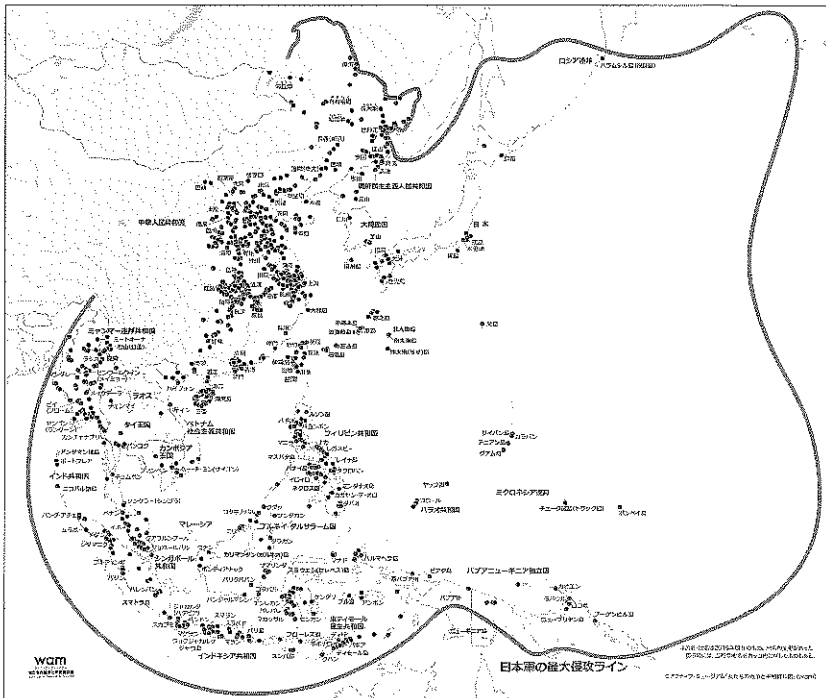
ースだったことです。

その後、朝鮮民主主義人民共和国、中国、オランダ、フィリピン、台湾、マレーシア、インドネシア、東ティモールなどから被害者の名乗り出と証言が相次ぎ、歴史や法律の専門家がその構造と日本政府の責任を明らかにし、世界の女性運動との連帯のなかで、日本軍性奴隷制は、戦争中のかわいそうな物語ではなく、日本軍の戦争犯罪として、やつと歴史のページに加わったと言えると思います。

問 妊娠した女性たちはどうなったのですか？

答 妊娠がわかった時点で中絶手術を受けさせられ、その日に慰安所の管理人に強かんされ、翌日から兵士の相手をさせられたというインドネシア人の被害者、マルディエムさんの悲痛な証言を間近で聞いたことがあります。日本軍は、女性の健康のためではなく、兵士の性病予防のためにコンドームをつけるよう指導しましたが、つけない兵士もたくさんいたといえます。中絶できず、ギリギリまで兵士の相手を

して慰安所で出産し、赤ちゃんを近所の家に預けにいったという証言もあります。また、妊娠した女性は見せしめのために殺され、それを見るよう強いられたという朝鮮の女性もいれば、妊娠8カ月で帰国を許された台湾の女性など、さまざまです。妊娠した女性の取り扱いは、記した軍の文書は発見されていないと思いますが、証言から



2019年に改訂したwam作成「日本軍慰安所マップ」。被害女性・元日本兵・目撃者等の証言と公文書によって日本軍慰安所が確認できる地域は、日本が侵略したほぼ全域にわたる。©wam

は、軍内部で明確な方針があったとは思えません。

問 「国家は謝罪してはいけない」という発言に違和感を感じましたか？

答 国家が謝罪した事例はありません。ドイツ政府はナチス時代の犯罪について様々な場面で今でも謝罪していますし、日本政府も2001年、ハンセン病患者の強制隔離について責任を認め、謝罪しました。国家権力の不法行為から生ずる個人への損害について、国は賠償責任を負わないという「国家無答責」という国家賠償法以前の化石のような法理も、戦後補償裁判を通じて、一定程度、乗り越えたと言えるのではないのでしょうか。映画での藤岡氏の発言だと思いますが、国家は謝罪してはいけないという主張の根拠を示してはいませんか？

問 戦時性暴力の被害者が救済された例はあるのですか？

答 何をもって「救済された」と言えるか、個人差があるかもしれま

せんが、自由権規約委員会の日本への最終所見(2008年)では、「被害者らの大半が受け入れ可能で彼らの尊厳を回復させるような方法で『慰安婦』制度に対する法的な責任を認め、率直に謝罪し、生存している加害者を訴追し、全ての生存者の権利として適切な補償を行うために迅速で効果的な立法府及び行政府による措置をとり、本問題について生徒及び一般の公衆

を教育し、及び被害者を中傷しあるいは出来事を否定するあらゆる企てに反論し及び制裁措置をとるべきである」と勧告していて、具体的で包括的です。この中でも、どうして無理だと日本社会が完全に無視してきたのが、責任者訴追です。映画に出てきた「女性国際戦犯法廷」(2000年に東京で開催)は日本軍性奴隷制の責任者を裁いた民衆法廷です。性奴隷システムは、自然にできたのではなく、誰かが判断、決定して作っています。命令を受けた兵士ではなく、制度をつくった責任者である天皇以下10名を訴追し、有罪が認定されました。そもそも戦後の戦犯裁判で裁かれるべきでしたが、東京裁判では植民地支配のもとでの犯罪は取り上げられず、性暴力も裁かれたのはごく一部でした。

防止には決定的に重要であるというのが1990年代の戦時性暴力を根絶したいと考えた女性たちの認識でした。

1990年代の旧ユーゴスラビアでの民族紛争や1994年のルワンダでの大虐殺で、武器の一つとして使われた性暴力を世界は目の当たりにしました。国連安保理は、1993年には「旧ユーゴスラビア国際刑事法廷(ICTY)」を、1994年にはルワンダ国際刑事法廷(ICTR)を設置し、そこでは、性奴隷化や組織的強かんが裁かれました。また、1998年に調印された国際刑事裁判所のローマ規定には、強かんや性奴隷制が戦争犯罪、人道に対する罪として定められるなど、武力紛争下の性暴力を裁く仕組みは進展しています。

とはいえ、性暴力が裁かれる事件は極めて少ないままであり続けています。2018年のノーベル平和賞が、戦時性暴力と闘ってきたヤジ・デイ教徒のサバイバー、ナディア・ムラドさんと、コンゴの産婦人科医師、デニ・ムクウェゲさんが受賞したのも、いかに国際社会が変化を

もたらせていないかの証左です。

アルゼンチンではいま、四十年以上前の軍事独裁政権下の性暴力を人道に対する犯罪として訴追し、有罪判決を出しています。容疑者は犯罪行為を否定しますが、刑事裁判の過程でこそ、事実を確認し、真実が明らかになっていく可能性があります。

性暴力を受けた女性たちの救済には、謝罪や賠償も必要ですが、性暴力犯罪をお金で解決するのはなく、犯罪なのだから裁きは不可欠だと思います。自分と同じような目には、二度と誰にもあつてほしくないと思う、サバイバーの思いにも応えるものではないでしょうか。

問 何を信じれば良いのでしょうか？

答 歴史は信仰とは違うので、「信じる」のではなく、主張に説得力があるか、自分で判断すべきだと思います。

歴史家は自分の研究対象について深く研究します。映画でも吉見義明（中央大学名誉教授・日本の戦争責任資料センター共同代表）

さんが「その文書のそういつた解釈はあり得ないと思います」と言っていました。軍の文書の解釈は、文書の読み方や当時の状況に関する知見がなければ不可能です。「書いてあることをそのまま」を繰り返すのであれば、誰だってできますよね。

証言を大事にするwamでは、「慰安婦」にされた女性の証言と、慰安所について語る兵士の証言を並べて展示して、来館者に考えてもらう方法もとっています。例えばインドネシアに焦点をあてた展示では、慰安所に連行された少女が、「私のことを最初に犯したのは、ツムラという兵士です。13歳だった私には、とても年をとっているように見えました」という証言、ネルの隣に、「面白い中尉がいて、ストップウオッチで平均値をとってみました。部屋に入ってゲートルをとって、遊び、ゲートルを巻いて出てくるまで、平均五分間であった」という兵士のネルもあります。慰安所での記憶の違いをどう捉えるのか、そこから何を見出すのか、正解を伝えるのではなく、自分で考えて欲しいと問いかけています。

「正しい歴史を伝える」という言い方は、左右両方が使っているの  
で、私は使いません。戦後長らく、「慰安婦」の存在をなかったことにしてきた歴史を「正史」として学んできたわけですが、名乗り出た女性たちの闘いによって、日本軍性奴隷制を歴史の一ページに書き込むことができたわけです。歴史は、新しい事実の発見やジェンダーの視点によって書き換えられていく部分があります。国家が正しいと決めた正史に歴史を問い返していくことこそ、女性であり、民衆である私たちの営みだと思います。

#### 回「慰安婦」問題に取り組む意味

戦争責任を問われて、国会議員の高市早苗が「当事者とは言えない世代だから、反省なんかしておりませんし、反省を求められるいわれもない」と発言したことがあります。日本軍によるアジアの女性の性奴隷化は私の犯罪ではありませんが、私が有権者として属している国が過去に行った犯罪・人権侵害です。その被害者が告発しているにもかかわらず、事実を認めず、賠



アクティブ・ミュージアム「わたちの戦争と平和資料館」の玄関。179名の被害女性のポートレートが迎える ©wam

償もしていないような状況では、被害者の苦しみと人権侵害は続いています。被害を与えた国の有権者の一人として、この国の態度や政策を変える責任があり、その責任を果たしたい。それは、日本ルーツの人間として私がこの問題に取り組む大きな理由の一つです。「お前は韓国人か」「朝鮮へ帰れ」と言われることもありすが、「日本人の敵は日本人だった」と言われた時は、「やっとわかったか！」と思いました。

私がこの問題に取り組み始めてから、多くの被害女性が亡くなりました。加害を認めない現政権を終わらせることができたとしても、メディアや世論を見ていると、植民地支配や戦争の責任に向き合うには時間がかかると感じます。この状況でwamという資料館が取り組もうとしているのは、日本軍性奴隷制の実態とこれまでの運動に関する証言や記録のアーカイブスを整備することです。記録がなければ研究も深化しません。日本政府は問題となりそうな文書を廃棄してしまうので、教科書に掲載するにも記録を残しておくことは極めて重要です。

「戦争展示物を撤去せよ」との爆破予告がwamに送られてきたこともありました。天皇の戦争責任を問うwamは、開館当初から攻撃が予測されていました。なので、展示パネルが壊されたとしても、次の日には同じパネルを作り直して伝え続けようと方針を決めていました。消されてきた声、やっとの思いで発せられた声を二度と消させてはならないからです。

「私たちに何かできることがありますか？」という質問を頂きました。みなさんが住む地域や大学で日本軍性奴隷制について、議論したり伝えたりする活動をしてはどうでしょうか。性暴力、差別、権利、植民地主義など、様々な切り口があると思います。ありがとうございます。